

〈夢の子〉の変容：ベルナノス『新ムーシェット物語』

野村，知佐子

<https://doi.org/10.15017/13232>

出版情報：Stella. 27, pp.59-68, 2008-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



〈夢の子〉の変容

——ベルナノス『新ムーシェット物語』——

野村 知佐子

『新ムーシェット物語』(1937年刊)が書かれた背景にはベルナノスのスペイン市民戦争の体験がある。当時マヨルカ島に滞在していた彼は、事態を理解できぬままに殺害されていく民衆の悲惨と、権力者側の不正を目の当たりにする。この体験は、見かけは「いかにも貧弱」であるが、引き抜くときには「それを養った一握りの土くれも一緒についてきてしまう」¹⁾植物のようなひとりの少女を創造させた。彼女は彼らの悲惨と声なき声を伝えるために創造されたのである。愛に裏切られ、人々の冷たさと戦い、ついには自死を選んだ彼女の生は果たして聖化されうるのか。本稿は『新ムーシェット物語』のヒロインであるムーシェットの生と死を検証する試みである。

＊

まず、この物語において強調されている貧者の属性のひとつとはなにか。それは『田舎司祭の日記』のなかにイエスの言葉として記されている。イエスの足に香油を注ぐマリアの行為をユダは身分不相応な浪費であると非難する。そのユダにたいするイエスの言葉を想定してトルシーの司祭は次のように語るのである。ユダは小銭を与えられた放浪者がパン屋に駆け込まないといって眉を顰める類の人間である。しかし放浪者に必要なのはパンではなく幻覚である。だから彼らは酒場へ行くのである。貧民はその壮麗さへの夢をアルコールのもたらす幻覚のなかに求めるしかない。このように彼らは夢のなかに生きているといえるとき、ムーシェットとはまさしく酒場に日参する父親から生まれたアルコール中毒の遺伝をもつ生粋の〈夢の子〉なのだ。

ムーシェットは実に誇り高い人間だったが、その誇りにふさわしく遇される

ことはなかった。あるとき彼女は法律が、自分のような未成年者を守っており、代議士と一杯やることのできるような者でさえ、時と場合によっては貧民の娘である自分に、頭を下げなくてはならないということを知る。この事実こそ、彼女の誇りに似つかわしいものであった。だからムーシェットは「処女という言葉を聞くと、馬鹿のように微笑」[1303] するのだった。処女性と誇りとは彼女の中で分かちがたく結びついていた。したがって自分自身を捧げる愛という場は彼女にとって至高の夢の場でありえたはずである。ある日のこと、学校の帰りに雨に降られ、森のなかに迷いこんだムーシェットは、そこで密猟者の少年アルセーヌと出くわす。嵐を避けてふたりは密猟者の小屋に逃れる。吹き募る嵐のなか、アルセーヌは森番のマチューを殺害したことをムーシェットにうちあけ、直後に癲癇の発作で倒れる。ムーシェットはその口元をエブロンで拭い、その頭を膝の上に捧げ持つ²⁾。このとき学校での音楽の時間にはあれほど忌み嫌った歌が彼女の口をついて出る。これは彼女の内における愛の目覚めであると同時に母性本能の目覚めでもあった。しかし彼女のなかに自分への好意を読み取ったアルセーヌはムーシェットを強姦してしまう。フィリップ・ル・トゥーゼは、もしムーシェットがアルセーヌを愛していなかったら、この強姦という事件は、彼女を恐れさせ、軽蔑させた数々の折檻とたいした違いはなかったはずだと述べる³⁾。愛していなければ彼女は堅い鎧を身に纏うようにして「自分のような娘は遅かれ早かれ男の侮辱を受けなければならなかったのだ」[1302] と挑戦の言葉を投げつけることもできたであろう。だがムーシェットはアルセーヌを心から愛した。愛とは暴力にたいして装甲された世界のなかのただひとつの欠陥、ただひとつの傷つきやすい点であり、そこから心にたっし殺すことができると、ル・トゥーゼはつづける⁴⁾。次の引用は、アルセーヌとの間に起こったことを母親に打ち明けようとした瞬間に母親に死なれたムーシェットの内面を描いたものである――

ふたたび彼女の恐れと怒りが逆戻りしてくる。彼女が憎むのは自分自身なのだから。なぜ？ どんな過ちを彼女が犯したというのか？ ああ！ いっそのこと過ちを犯してくれていたなら、本当に！ どんなふうにも後悔したら、彼女を責めさいなむ恥ずかしさにふさわしいのか、いくら貧しい頭をしぼっても納得のいく理由が見つからない。それは自分の肉と血への盲目的な恥ずかしさなのだから。[1320]

ムーシェットは自分の感じる羞恥心がどこからやってくるのかわからない。むしろ彼女を苦しめている羞恥心はアルセーヌによって与えられたものである。しかしアルセーヌを愛している彼女は、自分の羞恥心とそれを与えた人間とを結びつけて考えることができない。「自分の肉体を奪った者にたいして本当の憎しみ、女としての憎しみが感じられないのだ」[1304]。ただそれは「自分の血と肉への盲目的な恥ずかしさ」として認識されるのみである。

こうして彼女は警察を敵に回してでも彼を庇おうと覚悟を決める。そればかりかムーシェットはアルセーヌがマチューを殺害したことを心の底から願う。なぜなら殺人はふたりを結びつける唯一の絆であるから。だがアルセーヌもまた貧困にあえぎ、浴びるほどに酒を飲む〈夢の子〉であって、彼の犯したという犯罪は酔いに任せた虚偽にすぎない。不思議なことにふたりの体験した嵐も他の人々にとってはせいぜいのところ強い海風にすぎないものであった。この事実、エルネスト・ボーモンはガストン・バシュラールの理論を援用することによって説明を与えている⁵⁾。すなわち、荒々しい気候が激しい精神状態のなかにいる目撃者によって作り出されたものに他ならないとき、この嵐を作り出したのはふたりの子供の夢に相違ないと。激しい精神状態が荒々しい気候を作り出すのなら、その荒々しさがふたたび精神に跳ね返って殺人という恐ろしい嘘を作り出したとしても不思議はなかろう。マチューの生きているのを見てアルセーヌの嘘を知ったムーシェットは、それでもなお彼を断罪することを拒むのである。こうして愛は彼女に苦々しい失望を与えるも、彼女はそれを意識することができず、あくまでも愛を貫こうとする。このあり方は、自殺を巡っての彼女の意識のなかにも表れている。次節では自死を前にした彼女の実存の在り方について考察する。

＊

まずマチューの生きていることを確認してから、死にいたるまでのムーシェットの動きを簡単に見てみよう。村を彷徨するムーシェットは死者の夜伽をする香部屋係の老女フィロメーヌと出会う。かつては病気がちで不幸だったこの老女は、自分の仕えた主人のお嬢さんが結核になるのを目の当たりにする。主人の病状の亢進につれ、フィロメーヌの方は健康で輝いていく。彼女の

お嬢さんにたいする愛情には吸血鬼的なものがあり、彼女は相手の不幸を吸い込むことによって生きているとル・トゥーゼはいう⁶⁾。そしてアルセーヌとの共犯関係がなくなり、力尽き、なすすべもないムーシェットに香部屋係の女は不幸の力を発揮し、その秘密を奪い取ってしまうというのがエリック・ブノワの指摘である⁷⁾。彼女はムーシェットを正しい自己愛から引き離し、ナルシスティックな世界へと誘う。ムーシェットを身体的に凌辱したのがアルセーヌであるとすれば、精神的にそうしたのはフィロメヌであるとブノワはいう⁸⁾。少年時代のウィーヌが、歴史の教師からホモセクシャルな誘惑を受け、ナルシズムのなかへ沈んでいたのと同様の構造がここには見受けられる。しかしたとえそれが聖なる自己愛の堕落した姿ではあっても、誤った自己憐憫はまだムーシェットを生のなかに押しとどめることができる。ちょうど『悪魔の陽の下に』の同名のヒロイン、ムーシェットがカディニャンを殺害した後、自分を数奇な運命の人間と見なし、彼の墓の周りをめぐりつづけて生きながらえていたのと同様に。だがフィロメヌが彼女に与えたお嬢さんの遺品であるモスリンの純潔さは、ムーシェットのなかに自分の浅黒い手にたいする嫌悪を呼び起こし、それは自己憎悪へとつながっていく。彼女はその手をまるで自分のものではないかのように憎む。そして歳月の経過で脆くなっていたモスリンがずたずたになったとき、ムーシェットはわれにもあらず、足もとにきらめく沼に視線を注ぐ。そしてたまたまその場所を散策に訪れたメネトリエじいさんの目が彼の馬と同様に彼女にたいして無関心であるのを見たとき、ムーシェットは最後の一線を踏み越え、沼のなかに沈んでゆくのである。

こうしてムーシェットは死ぬが、彼女の属している「貧しい人びと」の死についてベルナノスは次のように言及している――

金持ちや権力者に悪魔的な誘惑の限りない手段を惜しみなく与える、覚めたやさしげな憎しみ、地獄から出てきた同じ死の力は、悲惨という聖なる刻印を押された貧しい人びとにたいして不意にしか襲いかかれないのだ。死の力はおそるべき注意力、たぶんひそかな恐怖をもって、日ごとに貧しい人々を窺うだけですまされなければならないまい。けれどこうした単純な魂のうちに絶望の裂け目が開くと、彼らの無知にとっては、自殺以外に、子供の自殺とそっくりな貧しい人びとの自殺以外には手段がないのだ。[1343]

貧しい者の死が子供の死と同様であるといわれるとき、彼らの死はけっして積極的なものではないことがわかっていく。むしろ彼らの「魂のうちに絶望の裂け目」が開くまで、彼らは自分自身の不幸を無意識のうちに生き、苦しんでいるといえよう。むろん、自殺というある一線を踏み越えるような事件が起こる場合、それは理屈では説明できない外見をもつことは一般的に起こりうることである。なぜなら可能性と現実性の間には深い断絶が存在するから。だが、ムーシェットは「いくつかの単純な概念しか使いこなさないし、それらを表現するにも語彙が足りないのだから」[1305]と別の個所で述べられているが、これは貧しい人びとの内面性そのものを表しているといってもよかろう。自殺という現象は論理では説明できない上に、その論理を駆使する語彙さえも彼らには欠けているのである。したがって彼らは自分でも意識せぬうちに、自死へと向かって歩みだしている可能性をもつということができよう。じじつブノワは『新ムーシェット物語』には作中いたるところに自殺への傾向が見られるとしている。たとえば学校での音楽の時間のことである⁹⁾。

ムーシェットが「透き通った声」で歌うのに成功したとき、彼女は自分の声を認識できない。先生の彼女にたいするネガティブな判断に苦しめられ、自分の美しさ、善良さを実現できないからである。「彼女は水晶の茎を砕こうとする。陰険にも喉にかかる声を取り戻して」[1267]。ここにはネガティブなイメージとの自己同一化が見られる。このときムーシェットは自分の美しい声（その存在の深い自発的表現）と悪い声（ネガティブな判断）との間で引き裂かれる。ふたつの声は互いに戦いあう。ふたつの軸の間の戦い、善と悪の、生と死の戦いが繰り広げられるが、ついに望むと望まざるとにかかわらず、誤った音階が彼女のすすり泣きに膨らんだ胸から迸り、彼女を開放する。誤った音階の表れは自殺への傾向と同じ性質をもつ。ムーシェットの意志はこの自己破壊の態度に参与することはない。したがって根本的に彼女は無垢である。自殺のメカニズムは、彼女がそれを望むことなしに現れるのである。以上がブノワの意見である。つまり自殺への傾向は、潜在的なものとしてムーシェットに内在するが、それは最後まで意識されることがないといえるだろう。

このことは『悪魔の陽の下に』のムーシェット（以下、混同を避けるためジェルメーヌと呼称）と比較するときより一層明確になる。ブノワはジェルメーヌが「絶望の誘惑」に自ら屈したのにたいして、ムーシェットはこの力の犠牲者

であってその意志は参与することなくこの力に屈したのであるとする¹⁰⁾。次の引用はジェルメーヌがドニサン神父との邂逅を通じて恐ろしい幻視を共有し、それによって死に誘われる場面である――

ああ！ 決意を固め、前もって悔恨を覚悟するとき、少なくとも一瞬は、明晰な願いをもってあたかも悪の呪いを汲みつくそうとするかのように悪にたいして躍りかからなかった者はない。それこそ情人たちをうめかせ、殺人者を狂気に陥らせ、すでに頸に縄をかけ、怒りをこめて蹴倒そうとするとき、死を決意した哀れな自殺者の眼に最後の輝きを点じる残酷な夢なのである。[S 213]

ジェルメーヌが破滅にひた走るとき、そこには「悪の呪い」を汲みつくそうとして「悪に躍りかかる」つよい自我意識がある。彼女の「悪の探究」は一足飛びに進み、気づいたときにはすでに汲みつくせるだけの悪を汲みつくしており、彼女に残された最後の悪とは自殺のみだったのである。彼女は自殺に向かって踊りかかる。一方マチューの死を、両者を結びつける唯一の絆として心から願いながらも、アルセーヌの破滅が確実であるとき、それは愛する者の破滅であるが故にムーシェットの破滅でもある。しかしムーシェットはそれを意識することなく、ただマチューの死を確認するためだけに歩いていく――

物体の落下を支配する法則のように、一定の冷酷な法則に彼女は従っている。ある種の絶望は固有の加速度をもつのだ。もう何ものも押しとどめられず、不幸の極みまで行くだろう。[1320-1321]

ジェルメーヌにおいて強調されているのが意志の力であるのにたいし、ムーシェットの場合はひとつの法則性によって支配されていることがわかってしまう。つまりムーシェットの自殺は死を意識することによる自殺ではなく、他者の罪、あるいは悪の歯車の結果であって、少女は無垢である。社会的惨めさ、父親のアルコール中毒、母の病死、先生のひどい仕打ち、アルセーヌによる強姦、村の女たちのおしゃべり、フィロメーヌによる死の影響からメネトリエ老人の無関心に至るまで、ムーシェットの死は悪の集合的増殖の結果として表れる。

最後の瞬間が近づいたとき、彼女は村を眺めて涙を流す――

沼に背を向けて彼女は眼を見慣れた風景の方へ向けた。そこに守りや支えを見つけたいと漠然と考えて。そしてすでに自分の視線を道の上に休らせていた。そこには秋

の日曜日、何度も通ってきた道があった。涙が流れてきた。[1344]

この涙は生命への消し難い愛を示しており、胃癌の宣告をされたときのアンブリクールの司祭の涙を彷彿させる。まもなく死ぬことがわかったとき、田舎の道を思い浮かべ、人生にたいする自らの愛を意識した彼は涙を流す。ムーシェットは意志の力で自殺を選び取るのではなく、アンブリクールの司祭のように不治の病で死につつあるような印象を与える。彼女は最後の瞬間まで自分を助け、支えてくれる何ものかを待ちつづけていた。もしメネトリエ爺さんの瞳に少しでも愛が認められたなら、彼女は死ななかったことだろうとブノワはいう。ムーシェットの意志は完全に生の側にある。最後の瞬間にも彼女は抵抗をやめなかった。沼のなかでも「彼女は頭をのけぞらせ、空の一番高い一点を見つめた」。このムーシェットの死について、ベルナノスはアンドレ・ルソーによるインタビューで次のように語っている――

〔ムーシェットの死は〕私の目から見れば、戦い抜いてもはや首を差し出すことしかできぬ闘牛の死なのです。ムーシェットは自殺するのではない。本当に。ついにやってはこなかった助けを最後まで待ちあぐねたのちに、斃れて眠りにつくのです。¹¹⁾

ムーシェットが自殺を図る時の描写に次のようなものがある――「滑るにまかせ」「命が自分の下から抜けていくように感じる」[1345]。こうした表現から明らかなように、生命を離れるのはムーシェットではなく、生命の方がムーシェットを離れるのである。彼女は死にたくなかった。ジェルメーヌが絶望の誘惑に屈し、自殺への意志を常に持ちつづけたのとは対照的に、ムーシェットの意志は自殺には参与しないことは先に述べたとおりである。ベルナノスはムーシェットの死が彼女にとってイエスとの邂逅の瞬間であることを疑わない。

かつて彼女は処女性にその誇りを見出し、愛のなかでそれを捧げることを夢見ていた。しかるに先述したように、それはアルセーヌによって無理矢理もぎ取られてしまう。それでもなお庇おうとしたアルセーヌの罪は、殺人者のそれではなく、単なる密猟者のそれに還元されてしまう。つまり彼女の夢見た贈与は、人間的愛のなかでは実現されなかったのであるとブノワは述べる¹²⁾。ムーシェットはアルセーヌが酔っていて自分のしたことが分かっていないのだと思う。ちょうど人々が何をしているかわからぬままにイエスを十字架にかけたよ

うに。彼女はアルセーヌの罪を担う。そればかりか村全体の罪を負いさえするのだ。ベルナノスはこの教区を非キリスト教化された場所として設定している。人々はもはや日曜の大ミサにいかず、鐘の音も聞かない。そうしたある日曜日に、ムーシェットはただひとり沼に入って自殺する。この死んだ教区において、彼女の死は『ウィーヌ氏』におけるマリコルヌの牛飼いの少年の死に匹敵する。この少年もまたフヌイーユの村人たちの罪を背負って死んだ。一方ボーモンはムーシェットの死について次のように述べる¹³⁾。死の直前に盛土の上から自分の住む小群落を眺める彼女の姿は、『田舎司祭の日記』の冒頭部でアンブリクールアンブリクールの司祭が丘の上から自分の任された教区を見つめる姿を彷彿させる。このとき司祭は教区によって十字架にかけられる感覚を抱く。むしろムーシェットは磔刑のことなど考えないため、これは彼女には何の意味ももたないが、高所というものはキリスト教徒にとってはゴルゴダの丘を連想させるものであるとボーモンはいう。もしムーシェットの死が単なる死として捉えられず、贈与として捉えられるとすれば、愛のなかで自分を捧げたいと願った〈夢の子〉としての願望は、キリスト教的なものとなり、彼女は世界の罪を引き受けながら自分を差し出したといえる。つまり人間的愛のなかでは成就されなかった自分自身の贈与は、キリスト教的愛のなかで成就されるのである。

＊

愛のなかで自分を捧げたいというムーシェットの願いはアルセーヌによって拒絶されるも、その後の彼女の絶望的な戦いと、その戦いに疲れ切った彼女の死は、意識せずして村人たちの罪を贖うキリストの贈与と同様の意味をもつものとなった。ここに〈夢の子〉としてのムーシェットの変容を見ることができよう。アルベール・ベガンが指摘しているように、この作品に司祭は登場しないが、物語の語り手は司祭としての役割を果たす¹⁴⁾。それはムーシェットに寄り添い、共感し、彼女が自分自身では説明できぬ心の襲のなかに分け入っていく。この、不在でありながら存在する司祭の機能の方へ次の研究は向かわねばならぬだろう。

註

- 1) Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962, pp.1330-1331. 以下、『新ムーシェット物語』と『悪魔の陽の下に』のテキストとしてはこのプレイアッド版『小説集』を使用し、同版からの引用については、そのページ数のみを [] 内に記す。訳出にあたっては『新ムーシェット物語』は松崎芳隆による邦訳（『ベルナノス作品集』第2巻、春秋社、1977年）を、『悪魔の陽の下に』は山崎庸一郎による邦訳（『ベルナノス作品集』第1巻、春秋社、1976年）を参照した。なお、作品を区別するため『悪魔の陽の下に』からの引用にはページ数の前にSを付した。
- 2) フィリップ・ル・トゥーゼによれば、このムーシェットの動作は、『田舎司祭の日記』で路上に昏倒したアンブリクールの司祭の顔を雑巾で拭うセラフィータの姿と同じく、ゴルゴダの丘へと向かうキリストの顔をハンカチで拭ったヴェロニカの動作を彷彿させるものである。さらにはアルセーヌの頭を「割ってしまわぬように」膝の上に捧げ持つムーシェットの姿はヴェロニカのそれを超え、ピエタへと通じる。アンブリクールの司祭の前に現れた聖母は母であると同時に子供であるが、ピエタの姿をとることによってムーシェットはまさに子供であると同時に母である者となるのである。Voir Philippe LE TOUZÉ, *Le Mystère du réel dans les romans de Bernanos*, Paris : Libr. A.-G. Nizet, 1979, p.317.
- 3) Voir *ibid.*, p.306.
- 4) Voir *ibid.*, p.323.
- 5) Voir Ernest BEAUMONT, «Structure et symboles», in *Études bernanosiennes* 9, Paris : Lettres Modernes Minard, 1968, pp.22-23. ムーシェットの失望を考えると、『ウィーヌ氏』のウージェーヌとエレヌの関係は対照的である。牛飼いの少年殺しの容疑者とされたウージェーヌはエレヌと性的交わりをもとうとするがそれを押しとどめる。彼は自分たち人間が愛し合うために別の方法をもたぬことを残念だと口にし、そして彼らはふたりで「一生に一度」しかできないこと、つまり心中を甘んじて受け入れるのである。
- 6) Voir LE TOUZÉ, *op. cit.*, p.325.
- 7) Voir Éric BENOIT, «L'histoire de l'amour sacrifié», in *Études bernanosiennes* 22, Paris : Lettres Modernes Minard, 2001, p.90.
- 8) Voir *ibid.*, p.93.
- 9) Voir *ibid.*, p.89. ムーシェットの反抗心が自分自身にたいして向けられたとき、彼女は道のいちばんぬかるんだところを歩く、あるいは泥のなかを転がる。これは溺れる動作を先取りしたものである、とブノワは述べている (voir *ibid.*, p.95)。
- 10) Voir *ibid.*, p.88. ふたりのムーシェットの対比は母親との関係のなかにも表れている。ドニサン神父に打ち砕かれてジェルメーヌが家へ戻ったとき、部屋に閉じこもって自らの姿を鏡のなかに見、その死を先取りした顔の虜となった瞬間に母親が

ドア越しに声をかけてくる。部屋に閉じこもる前なら相手が誰であろうと助けを求めたに違いないが、時すでに遅く、ジェルメーヌは母親を拒絶する。この拒絶は意志によってなされたが、ムーシェットの場合、彼女は自分からアルセーヌとの間に起こったことを打ち明けようとする。しかしこのとき母親の方が先に病のためこと切れてしまうのだ。

- 11) Voir «Grandeur et misère de Mouchette. Visite à M. G. Bernanos», interview par André ROUSSEAU, *Candide* du 17 juin 1937, reproduite par Michel ESTÈVE dans son livre *Bernanos*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque idéale», 1965, p. 244.
- 12) Voir BENOIT, *art. cité*, pp. 99–100.
- 13) Voir BEAUMONT, *art. cité*, p. 28.
- 14) Voir Albrt BÉGUIN, *Bernanos*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1982, p. 80.